むさしの
TALK

大須賀一雄さん
（水彩画家）

変わらない場所、変わった場所 どちらも絵になるまち

武蔵野市に長く住み、その変遷を見てきた画家の大須賀さん。
まちを描く目線から、武蔵野市の風景について語っていただきました。

私が国鉄の職員だった頃、宿舎が武蔵境にあったので武蔵野市に住むことになり、それから長い間このまちを見てきています。武蔵野市はずっと変わらずまちの至るところに緑があるのがいいですね。一番好きなのは桜の景色かな、いや秋の紅葉も銀杏（いちょう）もキレイですね、甲乙つけがたいです（笑）。ただ、まちの木がかなり老木になってきているので、手入れをしっかりしてもらって、いつまでもこの景色がなくならないように気をつけてもらいたいなと思います。

まち並みが整っているところも武蔵野市の特徴ですね。道路がよく整備されているのでまち歩きもしやすいですし、絵にも描きやすいです。電柱や電線が邪魔だという声を耳にすることもありますが、海外のまちもよく絵にする私から言わせていただくと、電柱や電線が日本らしい風景をつくっているとも言えるんですよね。

私はこれまでJR東日本の駅の絵を1000枚以上描いてきました。

もちろん市内にある吉祥寺駅や武蔵境駅も描きましたけれど、新しくなった吉祥寺の駅は外壁が窓ばかりなので苦労しました。絵にするのは大変でしたけれど、駅は時代と共に移り変わっていく歴史の証明のようなものだと思っているので、新しい吉祥寺の駅もそれを象徴しているように感じました。

連載している『武蔵野スケッチ物語』には、車などで出かけた時にひょいっと目についた場所を描いています。どこを切り取っても絵になる場所が多い武蔵野市ですが、「すてきなまちだな」とみなさんに思ってもらえるように、これからも1枚1枚気持ちを込めて描いていきたいと思っています。

大須賀一雄（おおすかかずお）
1937年生まれ。群馬県出身。SLの機関助士、電車の運転士を経て、得意だった英語を使い通訳と翻訳の仕事に携わる。絵画の才能にも秀でJR東日本絵画クラブ初代事務局長を務める。1992年にJR東日本を退社後は、水彩画家として活躍。2001年より本誌にて『武蔵野スケッチ物語』を連載中。

PRESENT

今回は市制施行70周年を記念し、大須賀一雄さんのサイン入り塗り絵本を抽選で10名の方にプレゼント！ 詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。